一刻

宮本百合子

制限時間はすぎているのに、電車が来なくて有楽町の駅の群集は、刻々つまって来た。

「もうそろそろ運動はじめたかい」

人に押されて、ゆるく体をまわすようにしながら、蔵原さんが訊いた。

「これからだ」

江口さんは栃木県で立候補した。新しくなろうとして熱心な村の人々にとって、根気よい産婆役をしているのであった。

「しかしね、モラトリアムでいくらかいいかもしれないよ。――この間うちの相場は、二百円だった」

「一票が、かい？」
「ああ。百円じゃいやだというそうだ。東京じゃ米で買う奴が多いらしいね」
そこへ、一台電車が入って来た。プラットフォームの群集は、例のとおり、止りかかる電車目がけて殺到した。すると、高く駅員の声が響いた。
「この電車は、南方より復員の貸切電車であります。どなたも、おのりにならないように願います」
丁度目の前でドアが開いて、七分通り満員の車内の一部が見えた。リュックをかついで、カーキの服を着て、ぼんやりした表情の人々の顔が、こちらを向いて

いる。ああこれが、有楽町か、という心もちの動きの出ている眼もないし、ひどい人だ、と思って投げられている視線もない。少し奥には、「ねんねこ」おんぶをした女の横姿も見えた。

「みんなやせてるね」

「蒼いや。な」

日頃あれほど粗暴な群集も、その場からちっとも動かず、カラリと開いているドアの方に注意をこらした。

「ぼーっとしているねえ、みんな」

そのうち、その電車は駛り去った。次に、又京浜が来て、私どもは、揉み込まれた。

上野へ来た。「降りますよウ」
「降せ！　降せったら……」
大騒動になった。しかし、エンジンの工合が損じ、ドアは開かないまま、上野を出てしまった。

鶯谷へついたとき、人々はせき立って、窓から降りはじめた。男たちばかりが降りている。そのうちやっと、ドアが開いた。

出口に近づいて行ったら、反対の坐席の横の方から、若い女が、おろおろになって
「あの、この辺にショール落ちていないでしょうか」

「こんなこみかたじゃ、落ちるせきがないですよ」

「どうしましょう！　舶来のショールで母さんの大事にしているのを、さむいからってかりて来たのに」

「降りるさわぎのとき、とられたのかもしれない。すっと引っぱって、とるんですて」

「まア！　わたし帰れないわ、どうしましょう。届けたって、出ないでしょうね！」

「出ますまいねえ」

　縋りつくようにきかれた男は、苦笑ときの毒さとを交ぜてぼんやり答えている。

「困っちゃったわ、全く。今日はじめて出たのに、こ

んな目に会って……」

半分啜り上げるような早口で歎く娘は、空のリュックを吊って前へうしろへ揺られているのであった。

〔一九四七年九月〕

底本：「宮本百合子全集　第十七巻」新日本出版社
１９８１（昭和56）年３月20日初版発行
１９８６（昭和61）年３月20日第４刷発行
初出：「談論」
１９４７（昭和22）年９月号
入力：柴田卓治
校正：磐余彦
２００３年９月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。